

ポーランド名画ビデオ鑑賞&交流会 2021

入場無料※要予約
どなたでも参加できます

COLD WAR

あの歌、2つの心

パヴェウ・パヴリコフスキ監督

2018年 | 原題 ZIMNA WOJNA | ポーランド・イギリス・フランス | ポーランド語・フランス語・ドイツ語・ロシア語 | モノクロ | 88分 | 日本語字幕

2018 カンヌ国際映画祭監督賞受賞/2019 アカデミー賞3部門ノミネート作品



2021. 10 / 1 (金) (開場 30 分前) 18:30~20:30

札幌エルプラザ 4F 大研修室 AB(北8西3)

[感染防止策] 体調・感染状況にご留意ください。手指消毒・マスク着用をお願いします。席間を広くとり換気を行います。飲食の提供はありません。氏名・連絡先を事前にお知らせください。会場(市)の指示で9/1の予定は延期となりました。



ポーランド、ベルリン、ユーゴスラビア、パリを舞台に、西へ東へと揺れ動き、別れと再会を繰り返して15年。過酷だがドラマティックだった時代に流されながら、「黒い瞳を濡らすのは一緒にいられないから」と、誰もが魂を揺さぶられる名曲「2つの心」で結ばれ、互いへの燃え上がる想いだけを貫こうとする二人。

民族音楽と舞踊、さらにジャズにのせて、髪の毛1本、草の葉1枚、そよぐ風に揺れる水面まで、すべてのショットが私たちの生きる世界はこんなにも美しかったのかと教えてくれる映像で綴る、心と五感を刺激する極上のラブストーリー。

[あらすじ] 冷戦に揺れるポーランドで、歌手を夢見るズーラとピアニストのヴィクトルは音楽舞踊団の養成所で出会い、恋におちる。だが、ヴィクトルは政府に監視されるようになり、パリに亡命する。ズーラは公演先でヴィクトルと再会、幾度かのすれ違いを経て共に暮らし始めるが、ある日突然ズーラはポーランドへ帰ってしまう。あとを追うヴィクトルには思いもかけぬ運命が待ち受けていた。 <https://coldwar-movie.jp/>



〈過去の関連記事 POLE99 (2020.1) 「The・座談会 映画の感動をシェア！」より抜粋〉

(氏間) 今日はこの作品の一番のお気に入りの部分やご感想を聞かせてください!

(佐藤) この映画は札幌では1週間限定の上映で残念でした。この監督をワイダやスコリモフスキに続く社会派と捉える向きもありますが、監督自身はそうした風潮には一歩距離を置いて「映画はイデオロギーを表現するものではなく、あくまで芸術的な価値を求めるもの。本作でも歴史的、政治的な事柄を訴えたわけではなく、テーマは主人公二人の恋物語。キャラクターが鮮烈であれば、物語や歴史的背景も生きてくる」と政治思想にはとらわれない映画作りを目指したようです。主役が二人とも魅力的、特に女優のヨアンナ・クーリックが…

(氏間) 同感です! いわゆる年の差恋愛ですが、ヨアンナ・クーリック扮する役名ズーラという少女の成長も描いていて彼女が実に魅力的。ヴィクトルとズーラふたりの感情は終始必要最小限のセリフの中に隠され、それぞれの時間をそっけないほどの暗転のくり返しの中に描いているんですが、不思議にとっても濃密な印象があります。

シヨパンと響き合って

(松山) 私は劇場鑑賞には間に合わず、英語版DVDでみましたよ。主人公のヴィクターには、かなり明瞭にシヨパンの情念と行動の傾向がにじみ出ていると思いますね。偶然かもしれませんが、冒頭のオーディションシ

ーンで歌われている“Ja za woda, Ty za woda”は、シヨパンが“Grand Fantasy On Polish Airs” Op.13 のオーケストラの導入部に引用した美しいマズルカです。(氏間)シヨパンとの関連を指摘されて「芸術と亡命」、異文化との接触も丁寧に描かれていることに気づきました。さらに脚本もいいのでは。冷戦を前面にくり広げる展開かと思いきや…伝統音楽の良質のドキュメンタリー映画を思わせる録音風景から始まり、あとになって冒頭の数分間は社会主義体制下、政府の文化政策の一環で新舞踊団の準備のためだったと分かります。史実がモデルに。1948年設立の「国立マゾフシエ民族合唱舞踊団」の存在がありますから…NHK「みんなのうた」で放送されて有名になった「踊ろう楽しいポーレチケ」がすぐに思い浮かびますよね(笑)。それになんと11月には、日本・ポーランド国交樹立100年記念の nationwide ツアー中のポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」(1953年設立)公演を間近に見る機会もあり、こちらも感激しましたア。

冷戦下の有為転変

(佐藤)よかったですね。ところで冷戦下の1949年ポーランドでピアニストと歌手志望の少女が運命的な出会いを果たし、時代の波に翻弄され東西を行き来しながら別れと再会をくり返すこの二人は、監督の両親がモデルだそうで、日本映画では『君の名は』、ポーランド映画では父の体験を描いた『カティンの森』が頭に浮かびますね。

ある雑誌のインタビューで監督は「母はバレリーナで17歳の時に10歳年上の父と出会いすぐに惹かれ合ったそうです。以来ふたりは別れたりふたたびくっついたりしながら、欧州を転々と。60年代になるとポーランドは共産主義が退化、モダンジャズ等の西洋文化が流入し、比較的自由的な空気に包まれましたが、この映画はそれ以前の困難な時代に自分自身のルーツに対する思いを重ね合わせたものです」と語っています。

(安藤)画面に〇年〇月というテロップがくり返し出ますね。ポーランドの年配の観客には日付の意味がすぐにわかるのでしょうか。私たちでも思い浮かぶのは、戦後のスターリン体制の最盛期、その死(1953)から、スターリン批判の開始・ポズナン暴動・ハンガリー動乱(56)、ベルリン

の壁構築(61)に至る引き締めと融和策のくり返しです。

2つの心、4つの瞳～いのちの限り愛す

(氏間)確かに…時系列に従って舞台が移り変わりますが、劇中に流れる曲は《オヨ～ヨ～イ》というリフレインが印象的な愛の民謡「2つの心 Dwa Serduszka」、物語が進むにつれいろいろなバージョンに姿を変え心に染み入る忘れられない名曲《ヴィクトルとズーラ⇒2つの心》へと…。パリで濃密に愛憎劇が展開するあたりは、生き抜くため複雑な愛情表現にならざるを得ません。違った環境でも、このタイプはエネルギーに溢れ常に戦っていて、強烈でいつも動き回って稀有な相互理解関係を結び、結局はたぶん一緒にはなれない孤独なる魂かと…。超越できるか…、サステナブルか…、やはり絶望的な関係でしょうか…

(安藤)ロシア革命と内戦の中で多くの作家や芸術家が西側(向こう側)へ亡命しました。その後、ナボコフのように米国で大成功する作家もいれば、ゴーリキーのようにソ連に戻って作家同盟議長まで上り詰めた者もいます。冷戦時代ポーランドでも同じことがくり返されますが、映画の主人公たちは収監覚悟で帰国し運命を選ぶわけで、とても美しいドラマに仕上がっていますね。

(松山)その昔から、重税、兵役、強制改宗などの政治的圧力から逃れた亡命者たちの帰国がいかに困難だったかが描かれていますね。

また、冒頭とラストの教会の廃墟は大戦の傷痕か、あるいはポグロムかホロコースト後に放棄されたシナゴークなのか…剥がれた漆喰の痕にイコンがみえるのは何故か…いずれにしても、人々の究極の祈りは未だ聞き入れられず、神は沈黙を保つ。

吹き抜ける風の向こうへ

(氏間)松山さんはDVDでくり返し確認できますね。十字路のある風景に佇み教会の廃墟で二人が画面右へ消え、繊細な哀しみを漂わせて野分めいた風が吹き抜け…ラストクレジットに流れるグレン・グールドの弾く「ゴールドベルク変奏曲」の「アリア」が二人の魂を浄化するように深い余韻を残します…人々が明確な選択を下した時代でした。

(安藤厚、氏間多伊子、佐藤晃一、松山敏)



パヴェウ・パヴリコフスキ 監督

1957年ポーランド・ワルシャワ生まれ。14歳で母国を離れ、ヨーロッパ各地を転々としたのち英国に拠点を構え、80年代末からドキュメンタリー番組を監督。母国で撮影した「イーダ」(2013)がポーランド映画初のアカデミー賞外国語映画賞を受賞。同じく母国で制作した「COLD WAR あの歌、2つの心」(18)で第71回カンヌ国際映画祭最優秀監督賞受賞、第91回アカデミー賞では外国語映画賞・監督賞・撮影賞の3部門にノミネート。